

井戸委員長の カンボジアの 子ども支援活動



子ども達とポップコーンを作る井戸委員長

カンボジアの子ども支援活動

『カンボジア』という国を知っていますか？ 私自身、カンボジアで思い浮かぶことと言えば、インドシナ半島でのおぼろげな位置、そしてアンコールワット遺跡、ポル・ポト政権、難民という単語ぐらいです。そんな私がかんボジアの子ども支援活動に参加したのは、カンボジアの子どもたちといっしょに遊んでみようという単純な思いからで、その思いはカンボジアの子どもたちは「わた菓子喜んでくれるだろうか」と膨らんでいきました。

私が参加したカンボジアの子ども支援活動は、自治労和歌山県本部50周年記念事業として昨年度から実施されているもので、10月12日から18日までの日程で

行われました。この事業は、NGOエフアジャパンが支援している「カンボジア国立幼稚園教員養成学校(PSTTC)」と「カンボジア子どもの家(ACC)」や現地NGO(SCADP)と共同で支援している「スラムの寺子屋学校」などを訪問し、子どもたちへの支援活動と交流を図ることを目的とするものです。それではCAMBODIAの5日間を報告したいと思います。

カンボジアの歴史と教育事情

プノンペン市内で最初に見かけたのは、交通量の激しい道路の真ん中に立っている少女でした。横断途中で車が動き出したのか思っていると、1歳ぐらい

の赤ちゃんを背負った7〜8歳の少女が車に向かって次から次へと手を出し、物乞いしている姿で、そしてこのような光景はその後も何度も見ることとなりました。カンボジアの現状には、すさまじい歴史とそれに伴う教育事情があります。

カンボジアは、1953年にフランスの植民地から独立し、その後1970年にクーデターが起こり内戦状態となりました。1975年ポル・ポト政権の誕生により内戦は終結しましたが、そのポル・ポトの恐怖政治により100万人とも200万人とも言われる大虐殺が行われました。1979年ヘン・サムリン

政権誕生によりポル・ポトは追われましたがその後も内戦状態は続き、1993年UNTACが総選挙を実施、現在に至っています。こうした長年の内戦とポル・ポト政権による主に知識層の虐殺の歴史が、今もカンボジアの貧困と低い教育レベルに繋がっています。

「カンボジア国立幼稚園教員養成学校(PSTTC)」と「カンボジア子どもの家(ACC)」

私たちが最初に訪問しましたACCは、3歳から5歳ぐらいの子ども（子どもたちの年齢がはっきりしないのは、スラムに

は出生届が出ていない子どもが多いからである）約90人が通園する幼稚園で、自治労和歌山県本部はそこに通うスラムの子どもたち30人に奨学金を提供し、教育支援を行っています。私たちはソリダ園長先生と面会し、その後園児たちに制服を贈呈しました。「チョム・リアブ・スウア」（こんにちは）と両手を合わせる園児たちの笑顔がとても印象的でした。



遠足先での交流風景

その後、PSTTCを訪問。自治労和歌山県本部はここでも15人の訓練生に奨学金を提供し、教育支援を行っています。ここでは訓練生といっしょに約1時間幼稚園で使う教材作りをしました。訓練生は15〜18歳ぐらいで地方の貧しい家庭の出身者が多く、両親が麻薬で服役している子もいるという話でしたが、そんなことなど微塵とも感じさせない笑顔で私たちを迎えてくれました。訓練生といっしょに食べた昼食は、日本語とカンボジア語のやり取りがはずみ、大変楽

しい食事でした。ちなみに私たちが頂いた料理名は『ムチュー』と教えてくれました。

プノンペン市内のスラム

次に私たちは、プノンペン市内のスラムを訪問しました。このスラムでは、ACCの職員が定期的に野外教室を開いており、その日も子どもたちに絵本の読み聞かせをやっており、その後ACCに通っている子どもたちの家庭を訪問し、お母さん、お母さん、子ども2人の4人家族で、お父さんは仕事にある日は日雇いの労働、ない日はバイクタクシーをやり、お母さんはスラム内で洗濯物を集めて洗っています。1日2〜4ドルの収入で生活しているとのことでした。スラムの中は、幅1メートルほどの通路が迷路のように走り、1間か2間の家が張り付いており、いったい何軒あつて、何人住んでいるのか見当さえつかない様子です。しかし、それ



絵本を楽しむ子ども達

にも増して戸惑いを感じるのはいったんスラムを出ると、隣にはレンガ造りの高級住宅が建っているという異様とも思える景色でした。

カンボジアは、富と貧困が共存する国であることを知りました。**トゥール・スレンとキリングフィールド**

ポル・ポトの恐怖政治の証として後世に伝えられるものです。

トゥール・スレンは、プノンペン市内にある刑務所で、そこには約2万人が収容され、そのうち生存者はわずか6人しかなかったというところです。建物は高等学校の校舎を刑務所に造り替えたもので、教室が拷問の場と化したのでした。現在、博物館として公開されていますが、そこには拷問に使用された道具や収容され死んでいった多くの人の写真が展示されています。

キリングフィールドは、プノンペン市内から約1時間離れた所にある処刑場で、今そこには、無数の骸骨が収められた塔とそれらの遺骨が掘り出された穴が何箇所も点在するところです。ガイドさんから「ここで、多くの人ヤシの葉のとげで首を斬られ殺された、子どもは足を持ち頭を木にぶちつけられて殺された」という話を聞かされました。

トゥール・スレンもキリングフィールドも決して特別な場所ではありません。トゥール・ス



本棚から顔を出す子ども達 (ACCにて)

レンは学校にしか見えないし、キリングフィールドは平原の中の木立ちにしか見えません。しかしひとつ間違えれば殺戮の場となります。これらを目の当たりにすると、言いようのない重い空気を感しました。こうしたことが行われたのが30数年前、ちょうど私が組合役員を始めた頃のことで、はじめて独裁政治の恐怖を体感しました。



訓練生と一緒に食事

スラム内の寺子屋学校

この寺子屋学校は、プノンペン郊外の田園地帯にあるスラムの中にあり、スラムの子ども約60人の小学生ぐらいの生徒が学んでいます。このスラムは、市内のスラムに比べ一層劣悪な環境にあり、周辺にはゴミが散乱し、水路の上のヤシの葉で覆われた小屋で生活している人もいます。

私たちは、まず寺子屋学校の近くの広場で子どもたちと一緒に



寺子屋の学校での交流

に遊びをしました。(この遊びは、まず全員が手をつなぎひとつの円をつくる。そして鬼になる2人を決め、その2人が円のどこかを切る。切られた右側の2人が右回りに、切った2人が左回りに円を1周し、どちらが早くもとの場所に着くかを競う遊びで、負けた2人が次の鬼となる。)その後教室に戻り、バルーンアート、折り紙、だるま落などですしよに遊びました。バルーンアートは大人気でした。

この子どもたちは考えられないほど人懐っこく、広場からの帰り道、私たちの両手には、何人もの子どもたちの手がつながっていました。

SCADP事務所

SCADPは、現地のNGOで奨学金を受けられない子どもや家庭の事情で学校に行けない子どもにも教育が受けられるよう支援しています。ここには小学生から中学生が生活し、勉強と伝統舞踊を学んでいます。私たちは、伝統舞踊の歓迎を受け、その後全員で白浜音頭を踊り、文化交流を図りました。いよいよ綿菓子機の登場、重かった荷物もここで子どもたちの歓声と笑顔に変わりました。

今、振り返って

今回のカンボジアの子どもも支援活動は、私に多くの体験を与えてくれました。それは何より

もカンボジアの子どもたちの笑顔とたくましさに出会えたことです。このことは私達が忘れていたものを思い起こさせる衝撃とも言えるものです。カンボジアはきつとこの子ども達によって復興されるでしょう。

もうひとつは、カンボジアの歴史と現状をみて、改めて平和と民主主義の大切さが実感できたことです。労働運動も「平和と民主主義を守るたたかい」をうたつてきましたが、平和慣れした中では漠然と通り過ぎてきたような気がします。改めて問い直す必要があるのではないのでしょうか。



伝統舞踊を舞う中学生

最後に、私自身これまで自治労働運動に携わってきたことの意味を再確認できたことです。改めてこれを契機に組合運動に取り組みたいと思います。

(井戸 智二)